

令和5年度 第45回少年の主張東毛地区大会

令和5年度第45回少年の主張東毛地区大会が、8月19日（土）、美喜仁桐生文化会館小ホールにて開催されました。

この大会は、中学生が日頃の生活を通して感じていることや考えていることを、自分の言葉で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って毎年開催されています。

今年は、4年ぶりに入場者の制限を設けず、通常どおり開催することができました。

各市町から推薦された19名の発表者は、それぞれの主張を力強く堂々と発表してくれました。

最優秀賞に選ばれた4名の主張を掲載します。（発表順）

私 の ふ る さ と

館林市立第三中学校 3年 小滝 莉央

三月十一日。この日は忘れようとしても忘れることができない。当時二歳だった私。記憶などない。ただただ、恐怖だけが、体に刻み込まれている。

私のふるさは、福島県南相馬市。現在は祖父母が暮らしている。少し車を走らせて見えるのは、海と堤防。町は跡形もなく消えている。初めてこの光景を見たときはぞっとした。その感覚は今でも鮮明に覚えている。

ある日、私は母に震災の話を聞いた。その話はとてつもなく残酷で、中にはドラマや映画の話とも思えるようなものもあった。

私の兄は当時小学4年生。五時間目の体育が終了したとき、とつぜん校庭が大きな揺れに襲われた。プールの水は大きく波を打ち、バシャバシャと音になっている。兄はランドセルも何もかも学校に置いて、走って家に帰ってきた。

「津波がくるから逃げて」そう母に一本の電話がかかってきた。誰が、津波が来ると思っただろう。私たち家族は高台にある祖父母の家へと避難した。親戚の安全確認をしたくても電話がつながらない。公衆電話で何度もかけたという。つながったのは深夜。つながるまで、不安で不安で、いっぱいだったそう。余震は夜も続き、眠れない夜を過ごしたという。

またすぐ、もとの生活に戻れると思っていた。一ヶ月後には家に帰れると思っていた。しかし、帰れなかった。気づけば十二年も群馬県で過ごしていた。

「もうこの家に、鍵を開けて、ただいま、ということはないんだ。」

母が言った言葉だ。七年前、私たちは福島県にある家を手放した。今は新しい家族が暮らしている。去年の秋、その家の前を通った。変わっていた。それがただただ苦しかった。辛かった。たくさんの、家族との思い出が消えてしまった気がした。

地震や津波だけじゃない。様々な自然災害は、予測ができない。そして、一瞬にして命が奪われていく。それだけじゃない。思い出も一緒に奪っていく。

「がれきは宝。」

これは当時現場に行った、復元納棺師の笹原留似子さんの言葉だ。ニュースでは、がれきはゴミ、のような伝え方をしていたけれど、そんなことはない、と心に響いた。ゴミなんて一つもない。がれきの一つ一つが誰かの思い出で、宝物である。この言葉が私が前を向くきっかけとなった。

震災から十二年。一瞬にして壊れた日々が戻りつつある。しかし、今でも仮設住宅で暮らす人、必死に命がけで家族を探している人がいることを、忘れてはいけない。ふるさとが、一日でも早く復興することを願っている。

私の出身地は群馬県なのかもしれない。でも、私のふるさとは福島県。そう思っている。

「震災がなかったらどんな暮らしをしていたのかな。」

今まで何回、何十回と思った。これからもたくさん思うだろう。でも、今こうして大切な家族や友人に囲まれて過ごしている。たくさんの人が支えてくれていることは忘れない。

「だからこそ、私は、強く生きる。」

本 当 の 多 様 性

桐生市立新里中学校 2年 町田 美紀

私は少し前に、とあるポスターをみて驚きました。なぜなら元々白い肌のキャラクターを褐色肌のモデルが演じていたからです。

みなさんは「ポリコレ」という言葉を知っていますか。ポリコレとは、ポリティカル・コネクトレスの略で、政治的公正などの意味があります。つまり、使われている言葉から差別や偏見をなくすということです。例えば、看護師。以前は看護婦と呼ばれていましたが、女性だけの仕事ではないので今は看護師と呼ばれています。

差別や偏見をなくすということは、とても大事なことです。実際に差別で苦しんできた、苦しんでいる人たちが世界中にいます。けれど、先程述べた白い肌のキャラクターを実写化する際、褐色肌のモデルを使うというのはどうなのでしょう。もちろん逆もあります。褐色肌やアジア系のキャラクターを褐色肌のモデルが演じる。更にポリコレと称して髪の長いキャラクターを坊主にしたり、体格を大きく変えたり。原作に忠実ではありませんし、たくさんの人種が出てくる映画は「どこの国の話なんだ。」と集中できないときもあります。

ではなぜこのような形になったのでしょうか。それは、

「この作品には白人しかいない。人種差別だ」「なぜ女性だからといって髪を長くするのか。LGBTQに配慮していない。」

などの声が寄せられたからです。果たしてこれは本当に必要な意見なのでしょうか。

さて、私がいう褐色肌のモデルと肌の白いモデルとは言い換えればそれぞれ黒人と白人です。今の黒人、白人という言い方に不信感を抱いた人も少なくはないでしょう。この2つの言葉に否定的な意味はありません。にもかかわらずNGワードのような扱いを受けています。

「ゲームや漫画には肌が白くて、やせていて可愛い女性キャラクターが多すぎる。白人主義なの？」

「トイレを男女で分けるのは平等を謳うこれからはふさわしくない。」

このように過敏に反応することはかえって悪意だと捉えられてしまいます。先程の映画の話に戻りますが、思い返してみるとヒスパニックや黒人が上司役をしていることが多かったです。意図せずそうなった可能性もありますが、なんだか

「ヒスパニックや黒人は上司になれない、出世できない」と言っているように思いませんか。行き過ぎてしまえば配慮も差別です。必要以上に忖度をされて、まるで腫れ物を扱うような対応をとられたら誰だって嫌な顔をするはずです。

形ばかりにとらわれ、心が伴っていない配慮を目にすることが多くなってきました。こうしておけば炎上しないだろう、ポリコレを重視する人たちになにか言われまいだろう、と投げやりなものばかりに見えます。男女トイレ以外にも男女兼用のトイレを作ったり、選択肢を増やすことはいいかもしれませんが、「トイレ、銭湯は男女ともに同じにしろ。」

と強要するのは間違っていると思います。こんな形ばかりの多様性を考えるだけでいいのでしょうか。気持ちは議論しなくて良いのでしょうか。

人種差別、男女差別をなくそう！という看板が大きく掲げられ、LGBTQの象徴であるレインボーフラッグばかりが目立つ、そんな街があったとしま

す。その街に住む人々は本当に平等なのでしょう。私はそうではないと思います。差別のある場所だから差別をなくそうと言うのです。はじめから差別や偏見がなければ、デカデカと平等の看板を掲げる必要はありません。私は、そんな差別という言葉を使わなくても良い世界になればいいなと思っています。

そのためにはなにが必要なのでしょう。多様性とはなにかを考えること？それともさまざまな考えを受け入れ尊重すること？それだけでいいのでしょうか。まず世界が一つになるための一歩として、本当に多様性を受け入れる気持ちについて考えることはとても大切です。多様性にとらわれない、本当の自由を目指して。皆さんも他人事ではなく、当事者として考えてください。

六 千 百 六 の 思 い

桐生市立中央中学校 3年 園田 莉菜

戦争をすることに何の意味があるのでしょうか。核戦争が私たちに与えるものとはなんなのでしょう。全身の皮膚がただれ、火の海の中をさまよう人々の姿。すでに亡くなっている我が子を抱きかかえる母親の姿。そして、放射線が原因による後遺症に苦しむ人々の姿。これは、人類史上初めて原子爆弾が投下された地、広島で私が見た戦争の現実です。

私が戦争について関心を持ったのは、小学校六年生のときに広島を訪れたことがきっかけでした。そのとき広島平和記念資料館で見た、想像することもできないような生々しい太平洋戦争時の様子に、大きな衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。広島で見た数々のものの中で、私が一番心を揺さぶられたのが原爆の子の像でした。この像にはモデルとなった一人の少女がいます。その少女は佐々木禎子さんといい、二歳で被爆し、放射線が原因による白血病でわずか十二歳という若さでこの世を去りました。この話をガイドの方から聞いたとき、当時の私の学年と禎子さんの学年が同じだったことから、私だったら死を受け入れられるのか、彼女はどんなに悔しかったのだろうと考え、割り切れない思いになりました。原爆の子の像には世界中からたくさんの千羽鶴が届けられていました。そのときふと思いました。「何か私にできることはないのだろうか。」

そんなことを考えていたとき、私に自分の思いを周りに伝えるチャンスが訪れました。それは、小学校の授業で桐生織り物についての作文を書くことになったことです。考えた結果、上毛カルタの「鶴舞う形の群馬県」という言葉と、地元桐生から平和への願いを広げていきたいという思いから、桐生織りで折り鶴を作り、広島に届けるという内容の作文が完成しました。この作文が地域の人々の目にとまり、幅1.2メートル、桐生だけに咲くカッソウという花の模様を

あしらった、桐生織りで織ったとても桐生らしい折り鶴が完成しました。そして千羽鶴を作るため、桐生の方々から折り紙の鶴を集めたところ、なんと予想を遙かに超える6106羽もの折り鶴が集まりました。その時に感じたのが、桐生の方々一人ひとりの平和を願う大きな思いでした。そしてついに、2021年12月5日、桐生の伝統的な技術によって実現された、多くの人々の願いを乗せた千羽鶴を、広島佐々木禎子さんの母校へ届けることができました。今回行ったことで一番大切なのは、広島に届けるということではなく、一人でも多くの方に平和について考えてもらうきっかけを作ることだったのだと四年間の活動を通して感じることができました。集まった6106羽もの鶴、一羽一羽にそれぞれの強い思いがあり、それが集まったときの力強さに78年前の人々の思いと現在の人々の思いがつながったような気持ちになりました。

戦後78年、G7広島サミットが開かれるなど、平和への意識が高まっている反面、ウクライナへの軍事侵攻や紛争などが現在も続いている地域がまだ多くあります。戦争の悲劇を繰り返さない。誰もが安心して暮らせる世界を創る。そのためには、私たち一人ひとりが戦争について知り、強い意志を持ち、平和を目指していくことが必要不可欠です。それは決して無意味なことではありません。折り鶴の活動を通して出会った人々が、そう思わせてくれました。この思いをこれからもつなぎ続けていきたいです。

戦争をすることに何の意味があるのか。自分ができることは何なのか。もう一度胸に手を当てて考えてみてください。

終わりのない比較

桐生市立清流中学校 3年 阿部 光瑠

私は自分を嫌いになりたくはありません。できることなら、自分のダメな部分から目を背けて生きていきたいです。しかし、目を背け続けるのには限界があり、どうしてもダメな部分が目に飛び込んできてしまいます。そうして結局、自分を嫌いになることを避けられずに生きてきました。みなさんも、自分のダメな部分の発見から自己嫌悪に陥ってしまったという経験、あるのではないのでしょうか。しかし私を含め誰も、自分のダメな部分をわざわざ見つけたいとは思っていないはずです。ましてや、自分を嫌うだなんて。ではなぜ、見たくもないダメな部分に目を向けて、したくもない自己嫌悪をしてしまうのでしょうか。私はそれらの原因に、「人との比較」が関係していると考えます。

「比較」とは、日常生活の中に当たり前のようにとけこんでいるものです。

身近なものであれば、「テストの順位」が挙げられます。テストの順位では、その順位そのものが人との比較です。ここでの「比較」は、今後の勉強のモチベーションに繋がる良い比較だと思います。「もっと上を目指そう。」「次はここに気をつけよう。」など様々な思いが生まれ、それが成長に繋がります。テストとは非常に億劫で、気が進まないものと思われがちですが、実は人との比較が良い刺激となり、自分のレベルが目に見えて分かる、考えようによっては特大チャンスなのです。そして、この「テストの順位」の最大の特徴は、「終わりのある比較」だということです。一位という明確な最高地点や十位以内などの区切りがあるテストでは、目標を立て、それを達成するという終わりがあります。この「終わりのある比較」は、ダメな部分に目を向けても、自己嫌悪には直結しにくく、むしろやるべきことを明確にできるという利点が生まれます。

では何が、どんな比較が自己嫌悪に関係しているのかというと、それは「終わりのない比較」です。「終わりのない比較」は、明確な最高地点や判断基準がありません。私は、この「終わりのない比較」によって、苦い思いをしました。

「あなたの趣味は？」と聞かれたら「絵を描くこと。」と即答できるくらい、私は「絵を描くこと」が好きでした。毎日絵を描いて、描くことの喜びと完成した時の達成感を日々感じていました。しかし、SNSに触れるようになってから、他の人の絵と自分の絵とを比べて徐々に劣等感を感じるようになりました。SNSでは、ハイレベルな絵がまるで、「これが普通だ」と言わんばかりに延々流れてきて、自分の未熟さに苛立ち、描く時はダメな部分しか目につかなくなりました。どんなに頑張っても比べものにならないほど上手な人がいる。そのことは、私から喜びと達成感を奪うだけでなく、自己嫌悪という感情を植えつけました。「みんな違ってみんないい」なんてこの時の私には全く思えなかったのです。

「終わりのない比較」をするという場面は、これから先数え切れない程あると思いますが、その度に傷ついていては心がいくつあっても足りないでしょう。そんな中、比較と上手く付き合っていくために、「良い部分に目を向ける」ことが重要だと考えます。

私は、自己嫌悪に陥った時、過去の書き溜めていた絵を見てみました。他の人とではなく、今までの自分と比べることで、自分の良いところである「努力」に目を向けることができました。比較をして、一見劣っていると感じ否定的になってしまうかもしれませんが、「この部分は自分の良さだ」と部分的に肯定することで、自己嫌悪に陥ることなく、成長に繋がれるのではないのでしょうか。

また、私は私自身を、みなさんはみなさん自身を嫌いにならないために、比較とは自分を苦しめるためではなく、成長の糧になるためにあることを忘れないことが大切です。比較が私達を追い詰めるのは簡単です。心を壊すのも簡単です。ですが、心は一度壊れてしまうと元には戻れません。だからこそ、唯一無二のその心を自分の力で守り抜いてください。